ギフト争奪戦に乗り遅れたら、ラストワン賞で最強スキルを手に入れた 2

[著] みももも
[画] たん旦

登場人物紹介

魔王子

人間界に侵攻しようとする
魔族軍の指揮官。

イツキ

本編の主人公。
Cランクの「洗浄魔法（ウォッシュ）」を得たせいで、
周囲からは「皿洗いの勇者」として
有名になる。

アカリ

SSレアのギフト
「神霊術（シャーマン）」を持ち、
イツキとともに行動する。

シオリ

Bランク「図書館」の
ギフトを得た少女。

ハルト

Sレア「忍者」。
言葉遣いもギフトに
あわせている。

ユータ

イツキの存在を目のかたきに
する赤髪の勇者。

杖突宏介（つえつきひろすけ）

齢（よわい）八十八の老人。真の勇者。

目次

第一章　魔界での闘争　7
第二章　赤髪勇者の物語　81
第三章　人間界戦線　174

第一章　魔界での闘争

平凡な学校で高校生活を送っていた俺――明野樹（あけのいつき）は、ある日、たくさんの人々とともに異世界へと召喚される。

異世界へ渡る際に、ギフトとしてスキルが配られたのだが、数あるスキルの中からどれを選ぶかは、早い者勝ちだった。

熱狂した大勢の人がギフトを奪い合うのを見ていて出遅れた俺は、結果的に、最後に残されたものを手にする。もちろん、それは最低ランクだったものの、「これでいいか」と割り切ることにした。

そして、異世界に繋がる扉を通り抜けようとしたとき、ラストワン賞として、「聖剣（ぶ）／魔剣（き）召喚」という最強クラスのおまけスキルを貰（もら）った。

このスキルを手に入れたことにより、俺の異世界生活は、想像を超えて波乱に満ちたものとなる――

聖剣／魔剣召喚には、使用中の姿が変わってしまうという副作用があった。それにより、天使と悪魔を混ぜた異形の姿になった俺は、そんな俺を魔物と誤解した真の勇者と交戦するが、大敗して魔界へ逃亡する。

ボロボロに傷つきながらも魔界にたどり着いた俺を助けてくれたのは、そこに住む、言葉を話す猫だった。俺を仲間と認めてくれた彼らと話をしていると、どうやら大陸の外から来た鬼の魔物に苦しめられていることが分かった。

事情を聞いた俺は、猫たちのために鬼退治を始めるのだが……

「ふう、これで私たちが見つけていた凶悪種は全部だにゃ。それにしてもすごいにゃ。本当に全部倒してしまうなんて……」

「まあ、これでも俺は、人間界では勇者なんて呼ばれているからな」

猫とともに、魔界に蔓延る魔物を倒していると、気がついたらほぼ丸一日が経過していた。

普通の魔物であれば、高レベルのステータスのおかげで簡単に倒すことができるのだが、鬼と呼ばれる種族は簡単にはいかなかった。

特に、一部の鬼は力が強いだけではなく、特殊な能力も持っている。そういう相手にはどうしてもギフトの聖剣／魔剣召喚に頼る必要があった。短時間であれば、聖化や魔化の影響も最小限に抑えられるし、そもそも制限時間の関係で節約して使うようにはしていた。だが、どうしても大量の

敵と戦っていたら、わずかずつでも使用時間が積み重なっていくわけで……

その結果、ギフトの残り時間は聖剣が五秒、魔剣が八秒となっていた。今までは時間を残すことを意識していたのだが、そろそろどちらか片方を使い切ってクールタイムに入り、使用時間を回復させたいところだな。

ただ、レベルが上がったため、使用時間が増えるに比例してクールタイムの時間も増え、今や半日を超えるほどになっている。しかも、その間ずっと聖化か魔化が発動している。

長時間の聖化や魔化は暴走する可能性も捨てきれないのだが、だからといってずっとこのままというわけにはいかない。それになんとなくだが、片方ずつであればなんとかなるような気がしている。

聖化と魔化を何度も経験したことで、その影響に対して慣れてきたのかもしれないし、レベルが上がった結果、耐性のようなものがついたのかもしれない。

いずれにせよ、このままこのギフトを永遠に封印することはできない。

だから、聖剣を発動させた。すると、体が聖化の影響を受けて変質していく。

白い翼が生え、皮膚は白くなり、髪は金色に染まり、身体能力が大幅に向上する。

「んにゃ？　人間!?　敵はもういないのに、いきなりどうしたんだにゃ？」

「（五、四、三、二、一……）よし、剣は消えたな。まあ、あまり気にするな。そういう儀式みたいなものだと思ってくれ……」

猫は、何も言わずに剣を召喚した俺に驚いた様子だったが、俺はそれを無視して聖剣を発動させたまま心の中で五秒間かぞえる。すると、使用時間を使い切った聖剣は消滅し、クールタイムに入った。視界の隅には、２４０という数字が表示される。

「今度は、剣が消えても見た目が戻らないんだにゃ？　人間ってのは、みんなお前みたいな能力を持っているのかにゃ？」

「いや、すべての人間がギフトを持っているわけじゃないんだが……召喚された勇者なら、何らかの能力を持っている。その中でも俺のは変わっているけどな」

魔界に住んでいるというこの猫にとって、人間を見るのは俺が初めてなのだろう。

ただ、俺のギフトは勇者の持つギフトの中でも特殊なものだ。それに、そもそも勇者という存在自体が人間の中でも特別な存在なのだと思うから、そのあたりだけでも簡単に説明しておこうかな。

「俺たち勇者は、この世界に召喚されたときにギフトってのを与えられたから、みんな大体特殊な能力を持っているんだ。俺のこれもそのギフトの一つなんだが……」

「でも、すげーにゃ！　私たちも敵を倒せば強くなるけど、人間ほど強いのは見たことがないし、しかも特殊能力まで持っているなんて！」

猫が言っている「敵を倒せば強くなる」というのは、経験値を稼(かせ)いでレベルが上がることではなく、単に戦闘の経験を積めば実力が上がるという意味なのだろうか？

もしかしたら、猫や魔物にもレベルと似たような概念があって、それで強くなっているのかもしれないが……このステータスカードは召喚者専用という話を聞いたことがある。そのあたりのことを確認するのは、難しそうだな。

「それにしても、猫の話だと、あの鬼は魔王の部下なんだよな？　何か目的があってここにいるというよりは、何かを待っているような感じだったんだが……一体どういうことなんだ？」

「それは……私たちにもよくわからないのにゃ。この先には、魔力を持つ魔物には通り抜けられない結界があるから、あいつらがいくら集まったところで、先には進めないはずなのにゃ……」

「結界？」

初めて耳にする情報が出たので聞き直すと、猫は「そう、結界にゃ」と言って、何かを思い出したように言葉をつなげた。

「……そういえばボスは、あれのことを『人間界に接する結界』とか言ってたにゃ」

「ということはまさか、魔王の目的は人間界の侵略なのか？」

俺が聞いても、猫は「だから、そんなことは知らないのにゃ！」と言って、首を横に振っているが……まあ、あまり深く考えても仕方がないか。

少し前に、人間界はある敵に襲撃され、大きな被害を受けている。

あれが魔王軍による攻撃だったとするならば、魔王は人間界への進出を目指していることになる。だとすると、ここに魔王の配下である鬼が集まっているのは、人間界へ侵略するための準備、とも考えられる。

そういえばあのとき、あの魔人は「結界がきつい」と言っていた。そうしたら、まずは結界を破壊するのが目的ということも、十分にあり得るのではないだろうか……

しばらく歩いて猫の住処までたどり着くと、「にゃーにゃー」と鳴き声を上げながら、言葉を話せない猫たちが俺たちを出迎えてくれた。

聖化で見た目は変わっていても、猫たちは変わらない態度で俺に接してくれる。聖化の影響で精神は苛立っているけれど、猫たちの可愛さに癒されることは変わらないな。

「人間、私たちの住処に着いたにゃ！」

「にゃー、にゃー！」

猫たちは、俺と言葉を話せる猫に対して何かを訴えているようにも見える。そしてその猫語を聞いた猫は、慌てたように俺の方へ振り向いた。

「人間、大変にゃ！　強大な力を持った何者かが、地下から上がってきているらしいにゃ！」

「地下……まさか、俺が通ってきた洞窟を？　ということは、まさかアカリとシオリが？」

あの二人なら、俺を追って魔界まで来ても不思議ではない。そして、その可能性が一番高い。

どうやって俺の居場所を調べたのかは分からないが、地上に俺がいないことから、俺が魔界に向かったと推測したのだろう。

もし俺が、アカリとシオリの立場だったとしたら、同じように魔界まで追いかけてでも助けるぐらいはしたはずだ。だから、二人が来てくれるのは、ある意味では「当たり前」のことなのかもしれない。だが、それでも危険を顧みずに魔界まで来てくれるのだとすれば、二人に会えたらまず最初に「ありがとう」と言おう。照れくさいが、まあそれぐらいは我慢しようかな。

「……人間、その顔は心当たりがあるのかにゃ？」

「いや、まだ確証はない。だがもしかしたら俺の知り合い……仲間かもしれない」

「そうかにゃ……とにかく確認しに行くにゃ！　だけど場合によっては……」

「わかってる。もし来たのが魔物だったら、俺が全力で倒す。それが俺の役割だからな！」

猫たちに案内されて、強大な力を持つ何者かが現れるというところに来た。少し離れた位置から茂みに隠れて見たその場所は、やはりというか、俺が人間界から通ってきた地下洞窟の出入り口だった。

この洞窟の出入り口には、俺が洗浄の力で修復した巨大な扉がある。この扉を開けるには、魔力をうまく流す必要があり、野生の動物や魔物が通り抜けるのは難しいはずだ。

ということは、ここから現れるのは俺と同じ勇者の誰かである可能性が高いのだが、そうでなくて正体が魔物だった場合、それはかなり知能の高い魔物ということになる。

だから決して気を抜くことはせず、気配を殺しながらしばらく待っていると、いくつかの人影が姿を見せた。

「ふう。ようやく地上が見えた。思ったよりも長い道のりであったの……」

「お館様、ここが魔界でござるか？」
「やっと着いた！　でも、ここからさらに、今度は地上を歩いて帰らなきゃいけないんでしょ？」
洞窟から顔を出したのは、アカリとシオリではなく、忍者と真の勇者の老人と……あと一人は知らない少年の三人だった。
少年も、真の勇者や忍者と親しげに話をしている様子だから、低ランクの勇者ではないだろう。ということは、まだ俺が会ったことのないSレアの、錬金術師か吸血鬼である可能性が高い。
耳を澄ませて話を聞いている限りだと、どうやらあの三人も、俺と同じように人間界からこの洞窟を通ってここまで来たようだ。
「人間、お前の言っている知り合いとは、あいつらのことかにゃ？」
「ああ。あの小さいやつは初めて見るが、ひげの生えた老人と、その隣の男は会って話をしたことがある。味方と言えるかどうかはわからないが、敵ではない……はずだ」
そもそも俺が魔界に逃げ込むことになったのは、聖化と魔化を重ねがけしたとき、あの真の勇者に魔物と間違えられて襲われたのが原因だった。だから、聖化の影響で見た目が変わっている今の俺だと、もしかしたら襲われる可能性もある。
聖化していない、元の姿なら、事情を聞いてくれるだろうし、理解してくれると思う。
あいつらが出てくるとわかっていたなら、聖剣の時間を残しておいて、聖化していない状態で話をしたかったところなのだが……今更後悔してもどうにもならない。

とりあえず、事情を説明するのは元の姿に戻ってからの方がいいだろうし、となると再会は八時間後か……
そんなことを考えながら観察を続けていると、三人組は洞窟を出てすぐの場所で立ち止まる。それから真の勇者が振り返って「安全なようじゃ。来るがいい」と言って、出入り口に向かって手招きをした。
どうやら、真の勇者たち以外にも、魔界に足を踏み入れた人がいるらしい。
彼らに続くようにぞろぞろと、十人……いや、二十人近くの男女が洞窟から顔を出す。
皆一様に重厚な装備に身を包んでいることから、おそらく彼らもこの世界に召喚された勇者なのだろう。
そして最後に、ようやく見知った二人が姿を見せた。
「ここが魔界……なのかな、シオリちゃん」
「その可能性が高いですが、確実なことは何も……それよりも、イツキから届く経験値が止まっています。彼は大丈夫なのでしょうか」
「大丈夫、きっとイツキ君は休憩してるだけだよ。でも、そうだね。早くイツキ君に会いたいね……」
二人の顔を見て、今すぐに再会して安心させてやりたいという気持ちが出てくるのだが、聖化して姿を変えている俺が無闇に近づくのは、いい考えとは思えない。

アカリとシオリなら、気づいてくれるかもしれないが……それでも今は、やめておこう。
「人間、それでどうするのにゃ？　お前の仲間を見つけたのだから、会いに行くのかにゃ？」
「そうだな……いや、そうなんだが、実はこっちにもいろいろ事情があってな。あいつらは聖化のことを知らないから、俺を見た瞬間に最悪の場合敵と認識する可能性もある。だから、できればまずは、アカリとシオリにだけ連絡を取りたいんだが……」
「アカリ？　シオリ？　人間の個体名のことかにゃ？」
「ああ、あそこにいる二人なんだが……」
アカリとシオリを指さして説明すると、猫はそちらに視線を向けながら、ふむふむと頷いた。
「そういうことなら、私に任せるにゃ！」
「任せる？　何を？」
「私たちは、気配を消して行動するのが得意なのにゃ！　だから、その人間どもに伝言を伝える仕事は、私に任せてほしいのにゃ！」
気配を消したところで、真の勇者をごまかせるとは思えないが……だが、そうか。猫なら、近づいても怪しまれない可能性は高いか。
だとすると、猫に伝言してもらうのも悪くないのかもしれないな。
「とりあえず二人には、俺、つまりイツキという人間が無事だということだけ伝えてくれないか？　それと、できればあの二人から現在の状況とかを聞いておいてもらえると助かる。そもそも他の勇

者たちが何をしに魔界まで来たのかとか……」
「わかった、任せるにゃ！」
そう言って猫は気配を消して、アカリとシオリのもとへと走っていった。
猫が通りがかった瞬間、真の勇者がピクリと姿に反応したが、どうやらただの猫だと勘違いしているようだ。猫はそのまま他の勇者に気づかれることなく、無事に二人のもとへたどり着いた。
二人の前に姿を現した猫は、まるで日本の猫のような仕草でシオリの足元に擦り寄って……シオリはそんな猫を可愛いとでも思ったのだろうか。特に怪しまれることもなく彼女に抱き上げられていた。
あれは完全に、猫のことをただの野良猫だと思ってるんだろうな。まあ実際のところ、言葉を話せる以外は日本の猫と変わらないし、間違っているわけではないんだが……
その後、抱きかかえた猫が突然喋り出したため、シオリが驚いて投げ捨てそうになりつつも、ここからでは耳を澄ませても聞こえないぐらいの小声で話し合いを始める。そしてそれが終わると、猫はシオリの腕からぴょんと抜け出して、その場から離れていった。
シオリは名残惜しそうに、今まで猫を抱いていた両腕を見つめている。
「人間、あの人間と話をしてきたにゃ！」
しばらく待つと、顔を手でゴシゴシと毛繕いしながら、猫が歩いて戻ってきた。
「お疲れ。シオリはなんて言ってた？」

「とりあえずイツキが生きていると伝えたら、お前と直接会って話をしたいと言っていたにゃ。待ち合わせ場所はこちらが決めて、案内は私たちが引き受けるにゃ」
「詳しい話はそのときにってことか。……とにかく、助かった。本当にありがとう」
「このぐらい、お安いごようだにゃ！」
「待ち合わせ場所は、猫たちの住処でもいいか？」
「問題ないにゃ！」
勇者たちはまだ、俺がここにいることに気づいていないようだが、いつまでもここにいたら、いずれ誰かに見つかるだろう。
アカリとシオリの案内は猫たちに任せることにして、俺はこの場を離れて猫の住処に戻ることにするか。
「俺はもうこの場を離れるから、二人の案内は猫、お前たちに任せるぞ……」
「わかったにゃ！　私はここで見張りを続けるけど、お前は一人で帰れるかにゃ？」
「ああ、問題ない。それじゃあまた後で……」
「――その前に少しだけ話を聞きたいのでござるが……お主、イツキ殿で間違いないでござるな？」
「「んにゃ!?」」
その場から立ち去ろうとした瞬間。
ついさっきまで気配もなかった場所から突然声が聞こえたせいで、喉の奥から変な声が出てしまった。まさか、猫の鳴き声とのハモリを経験することになるとは……

「すまぬ、驚かせるつもりはなかったのでござるが……我らを監視する目が気になったのでござる。ところでお主、雰囲気から察するにイツキ殿とお見受けするが、いかがでござろう」
落ち着いてから改めて見ると、そこにはいつの間にか忍者がいた。距離が離れているし、他の勇者が気づいた様子はないのだが、こいつには普通にバレていたらしい。さすがは忍者というところか。
「あ、ああ。よく分かったな。確かに俺だ。イツキだ。忍者か、久しぶりだな」
「やはりイツキ殿でござったか。隠れて出てこなかったのは、その容姿が原因でござるか？」
猫たちは、俺の姿が変わっても特に何も言わなかったから、もしかしてそこまで姿が変わってないのかとも思いはじめていた。しかし忍者の反応を見る限り、人間視点だと俺の体はかなり変化しているようだ。
「まあ、そういうことだ。事情があってこんな姿になっている。誤解を与えるのも悪いと思うから、元に戻るまでは一人で行動しようと思っているんだが……」
忍者は「ふむ」と言いながら、俺の全身を上から下までざっと観察すると、改めて何かに納得したかのように口を開いた。
「なるほど、これがあの二人が話をしていた『変身』というやつでござるな。見た目から察するに、それは聖化……ということは、魔化の変化はまた別のパターンでござるか？」

「……まあそうだが、あの二人はお前にそんなことまで話していたのか？」
「これは拙者が盗み聞きをしただけでござる。誰にも話しておらぬから安心するでござる！」
盗み聞きって……。さすが忍者。でもこいつが、モラルを守ってくれる忍者でよかった。
「人間、こいつは何者にゃ？　さっきから、目の前にいるのに全く気配を感じないにゃ！」
「ああ、こいつは忍者だ。名前は……まあいいや。だが忍者、勝手に抜け出して俺のところに来たりして、大丈夫なのか？」
「安心せよ、これは拙者の分身でござる。本体は今も本陣で仮拠点の設営をしているし、この分身には誰も気づいていないでござる！　そして拙者の名前はハルトでござるよ、イツキ殿！」
「忍者？　分身……？　人間の言っていた通り、人間はみんな変なやつばっかりだにゃ」
猫は、俺と忍者をひとまとめにして「変なやつ」であるかのように言うが、失礼な。
確かに忍者が変なやつなのは間違いないが、俺はせいぜい武器を出したり物を綺麗にしたりできるだけの普通の人間のはずだ。
「……まあ、いいか。ところで、せっかく来てくれたなら、お前たちがこんな場所まで来た理由を教えてくれないか？　俺一人のために、あれだけ大勢の勇者を連れてくるってのは、さすがにおかしいしな」
「そのあたりのことは、アカリ殿とシオリ殿も交えて話しておきたいでござる。猫殿との話を聞いていた限り、二人とは合流するつもりなのであろう？　まずは集合場所に行くでござるよ！」

猫とシオリの話まで聞いていたのか……こいつの前で隠し事をするのは、もう無理かもしれないな。
忍者を連れて猫たちの住処へ向かうと、そこで待機していた普通の猫たちは、異常に気配の薄い忍者を見て、さっきの繰り返しのように不審に感じて警戒心を強める。そこで俺が「こいつは大丈夫だ」と言うと、なんとか落ち着いてくれた。
そのまま二人で洞窟の中に入るが、猫たちはそれでも不気味がって忍者には近寄ろうとしないから、自然と俺のもとへと集まってくる……これはこれで、まあいいか。
猫と戯れながら待っていると、洞窟の外から何かが近づいてくる足音が聞こえてくる。
「イツキ君……？　いる？」
案内役の猫に連れられてきたのは、アカリだった。どうやら無事に、他の勇者に気づかれることなく、ここまで来られたらしい。
「アカリか？　入ってきて大丈夫だぞ」
「失礼しまーす……って、誰？　まさか、イツキ君？」
「ああ、俺だ。聖剣の……聖化の影響で見た目が変わっているがな」
「そうなんだ。なんかすごいことになってるね。外国の人みたいな？」
「確かに今のイツキ殿は、北欧風な雰囲気が漂っているでござるな……」
「うんうん、そうそう……って、忍者君？　なんでここに……君はいつも突然現れるよね」

アカリは、突然現れた忍者に驚いているような、もう慣れたからあまり驚いてもいないような、不思議な反応をしている。

こいつの神出鬼没っぷりについては、俺もいちいち反応するのではなく、そういうものだと割り切ってしまった方がいいのかもしれないな。

「……そういえばアカリ、シオリはどうしたんだ？」

「シオリちゃんは、向こうに残ってるよ。私たち二人が同時にいなくなると、さすがに怪しまれちゃうからね」

まあ確かに、ここが魔界である以上、誰にも言わずに勝手に抜け出すのは要らぬ心配をかけることにもなりかねない。それと、ばれかけたときに誤魔化しというか、言い訳をするやつが残る必要があったということか。

俺の事情については、シオリにも聞いておいてほしかったのだが……あとでアカリから伝えてもらうことにしよう。

「そういうことか。それじゃあまずは忍者、話してくれ。今はそもそも、どういう状況なんだ？」

「あ、イツキ君、それなら私から話そうか？　えっと、元々はイツキ君の捜索のために洞窟に降りたんだけど……」

「アカリ殿の言うことも事実なのでござるが……実は、拙者たちは元々魔界に来る予定だったのでござる。今回は道中の下見をする予定だったのでござるが、何者かの妨害によって帰れなくなってしまい、計画を前倒すことにしたのでござる」

「え、そうだったの？　ということはもしかして、忍者君たちはこの洞窟が魔界に通じていることも最初から知ってたの？」

「黙っていて、すまなかったでござる……」

どうやら、アカリたちにも黙っていた事情が、真の勇者たちにはあったらしい。

俺だけでなく、アカリやシオリが揃ってから話をしようとしていたのは、そのあたりの情報を共有したかったからなのだろう。

「私たちも魔界の情報は聞いていたんだけど……イツキ君、ここってやっぱり魔界なの？」

「ああ、おそらくな。猫みたいな友好的な魔物もいれば、鬼みたいな敵対的な魔物もいる……」

「イツキ殿！　今、鬼がいると言ったでござるか？」

今まで倒してきた魔物の種類を思い浮かべながら話をすると、忍者が突然詰め寄ってきた。もしかして真の勇者たちは、魔界にいる鬼の情報まで手に入れていたのだろうか。

「ああ、いたな。なかなか強かったが、倒せない敵ではなかったぞ？」

「それは……お館様の情報とは食い違っているでござる。鬼は、海を越えた魔王の領地にしかおらぬはず」

「ああ、それは……」

魔王の領地と聞いて思い出したのだが、そういえば猫たちも「最近は魔王軍が活発に……」とか、

そんなことを言っていた気がするな。
情報のタイムラグはあるようだが、真の勇者たちはそこまで情報を掴んでいるらしい。
「そういえば、確か猫は、あの鬼は海を越えた別の大陸から来たとか、そんなことも言っていたが……」
猫に言われたことを思い出していたら、ちょうどそのタイミングで、外から言葉が喋れる猫が飛び込んできた。
慌てた様子だが、勇者たちの見張りを切り上げて、急いで戻ってきたということなのか。
「なあ、猫。俺が倒したあの鬼は……」
「人間、大変にゃ！　話し合いなんてしている場合ではないにゃ！　今すぐ戦いの準備をするにゃ！」
「一体、何があったんだ？　戦闘準備って……鬼は全て俺が倒したはずじゃなかったのか？」
「海の向こうから、さらに大量の魔物が押し寄せてきているにゃ！　魔王軍が本格的に攻めてきたに違いないにゃ！」
話を聞いて、俺とアカリ、忍者の顔に緊張が走る。
「……どうやら、猫殿の言う通りみたいでござる。海の向こうから魔物の群れが……アカリ殿、イツキ殿、拙者は先に戻っているでござる！　お主らにも協力してほしいでござる！」
忍者はそう言い残すと、「ぽすん」と空気が抜けるような音を立てて消滅した。おそらく、分身

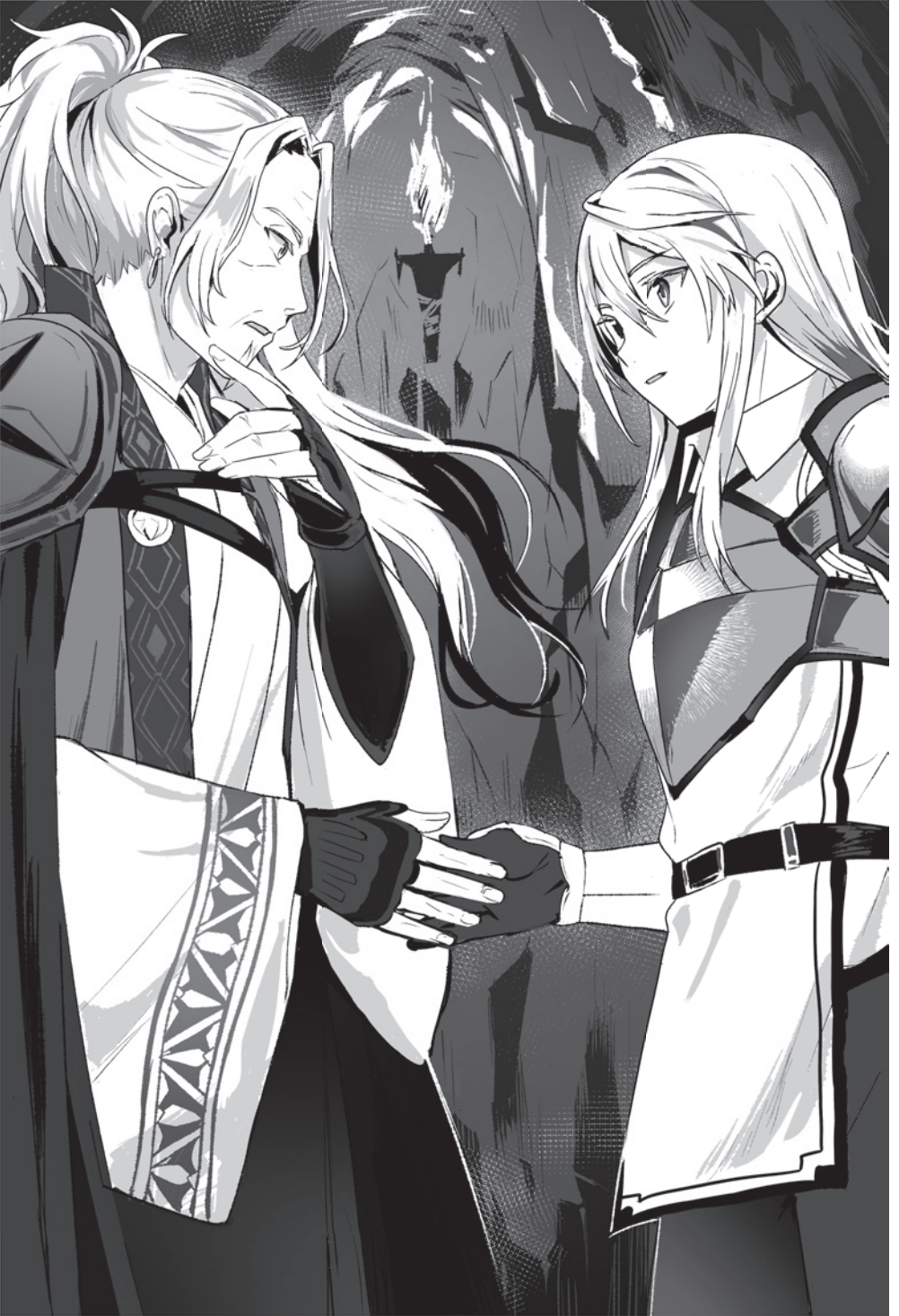
を解除して、他の勇者たちと戦いの準備を本格的にするつもりなのだろう。
俺とアカリも慌てて洞窟から飛び出した。
そして、海の彼方に目を凝らすと、夕日に混じっていくつもの黒い影が見える。まさかあれ全部が魔王軍の戦闘部隊だろうか。数えるのも嫌になるぐらいの小さな点が、海から陸地に向かって飛んできているのだが……
「イツキ君！　私たちも戻ろう！　そして、一緒に戦おう！」
「……そうだな、聖化が解除されるのを待つ余裕はなさそうだ。勇者たちに説明するのは面倒だが、目の前のあれに比べたら些細な問題だな！」

◇

アカリについていくと、大勢の勇者たちが慌ただしく戦いや移動の準備をしているのが見えてきた。
その中からシオリを見つけたアカリは、彼女に駆け寄って、こちらを指さしながら小声で何かを話していた。
シオリはアカリに言われて俺のことに気がついたらしく、周囲の人に気づかれないように俺のもとへと駆け寄ってきた。

「……イツキですか？」
「ああ、俺だ。こんな姿だがな。ところでシオリ、今はどういう状況だ？」
「見ての通りです。魔物の群れ――魔王軍が海を渡ってきました。忍者は偵察に向かいましたが、私たちは洞窟に避難することになったので、その準備をしているところです……」
勇者たちは、魔界に着いたので外にテントを広げていたのだが、魔王軍が攻めてきたとなって、洞窟の中に戻ることにしたようだ。せっかく取り出したばかりのテントを片づけて、洞窟の中へと荷物を運んでいる。
口々に文句を言いながら、面倒くさそうに……ではあるが、緊急事態であることは理解しているのか、なんだかんだでちゃんと作業はしているようだ。
「シオリちゃん、私たちのテントも片づけ終わったよ！」
「ありがとうございます！　では私たちも、彼らについて移動をしましょう。イツキもついてきてください！」
「あ、ああ、わかった……」
洞窟の中には、外からは見えないようにいくつものテントが張られている。また、ランタンみたいに光る魔道具で明るさも確保されているようだ。
俺たちは、そこそこの広さがある洞窟の一角を陣取って、そこにテントを広げると、洞窟内を歩き回っていた真の勇者と出くわすことになった。

「あ、おじいさん。私たちの準備は終わったよ！」
「アカリか。それに、シオリと……その者は？」
「おじいさん、この人が、私たちの捜していた勇者、イツキ君だよ！」
この姿では初対面の真の勇者に「ども、イツキです」と話しかける。すると、どうやら彼は、アカリとシオリからすでに俺のことを聞いていたようで、「そうか、お主が……」と俺のことをじっくりと観察しはじめた。
「お主が、イツキか……聞いていた見た目とは、違うようじゃが？」
「イツキ君の見た目が変わっているのは、イツキ君のギフトの副作用のせいだよ、おじいさん！」
「見た目が変わっても、イツキがイツキであることは変わりません。少なくとも敵ではないので大丈夫ですよ」
「ふむ。アカリとシオリが言うのであれば、そうなのじゃろうな」
今の俺は日本人離れした姿で、しかも白い羽まで生えているとはいえ、魔化ほど人間離れしているわけではない。そのことが関係するのかどうかはわからないが、いずれにせよ真の勇者はアカリとシオリの言葉を信用することにしたようだ。
一度は暴走した俺を殺すために使われた手を、今度は武器を握らずにゆっくりと俺に向かって差し出した。
「ワシは杖突宏介（つえつきひろすけ）。ギフトは勇者じゃ。よろしくな」



「ああ、俺はお前のことを知っている。真の勇者って呼ばれてるんだろ？　俺は明野樹。こちらこそよろしくな」

一度は殺し合った者同士として握手に応じ、ただ従うだけのつもりはないという意志を込めて、強く握りしめる。

返答のように、真の勇者も手に力を込める。握力は、やはり老人のものとは思えない。見た目だけならただの老人でしかないのだが、その実力が凄まじいことを、俺は直接体験しているから知っている。できれば、今後は敵対はしたくないところだが……

「それで真の勇者、これからお前たちはどうするつもりなんだ？　魔物の群れが迫っているんだろ？」

「そうじゃの……ワシの想定よりもかなり早いのじゃが、いずれにせよやつらの目的を達成させるわけにはいかぬ。イツキよ、お主も手伝ってくれぬか？」

「それはいいが……その言い方だと、魔王軍の目的を、あんたは知っているってことなのか？」

魔物と戦うことは、元から考えていたことだから問題ない。

だが、彼らが何のために、海を越えてまでこんな場所へと向かっているのかは知らなかったから、できれば聞いておきたいところだ。

真の勇者がどうやってそんな情報を手に入れたのかも気になるが、自分から話そうとしないということは、聞いても答えてはくれないのだろう。

「……やつらは、この地点に人間界侵略のための橋頭堡を構築しておるのじゃ」
「橋頭堡？」
「そうじゃの……。わかりやすく言えば『攻略用の拠点』を作ろうとしているのじゃ。この地に要塞を構築し、人間界に攻め込む足がかりにするつもりなのじゃ！」
「つまり、墨俣の一夜城みたいなやつか……」
猫から聞いていた話だと、ここから少し行くと、人間界と魔界を隔てる結界のようなものがあるってことだったな。
ということは、魔王軍はこの場所に拠点を作って結界を破壊……あるいは無効化し、そのまま人間界に攻め込むつもりなのか。
すると、俺が倒していた鬼たちは、そのための下見が目的だったのか？
だとしたら、敵が慌てて大軍を率いてきたのは、下見に行かせていた魔物が俺に殺されたから、戦力を小出しにして倒されるのを避けたかったとか……まあ、これは俺の勝手な想像でしかないが。
真の勇者がどうやって魔王軍の侵攻のペースを掴んでいたのかはわからないが、予定より早まったとしたら、そのあたりが理由だろう。
つまり、この急襲には、俺の責任も多少なりともあるというわけか。
「イツキ……そして、アカリとシオリもそうなのじゃが、ここから先の戦いに参加することを強制はせぬ。海を越えてくる魔王軍は、人間界で戦った魔物と比べて、桁違いに強く、凶悪なはずじゃ。危険もある。お主らが人間界に引き返すというのなら、ワシはそれを止めるつもりはない。お主らが、選ぶのじゃ……」
真の勇者は、それだけ言って、その後は黙ってしまった。
洞窟内に、不気味な静寂が訪れる。
「……だってよ。二人とも、どうする？」
「そうだね、イツキ君。……どうしようか、シオリちゃん」
「そうですね……」
俺とアカリから結論をたらい回しにされたシオリは、少し考えるそぶりをして俯く。だが、すぐに頭を上げると俺やアカリと目を合わせ、わかりきっていることであるかのように、嘆息しながら呟いた。
「イツキも、アカリも。結論は出ているのでしょう？　私たちには、手伝う他に選択肢がありません。ここで逃げても、いずれ魔王軍は人間界に攻めてくることになりますし、それにもし逃げてしまったら、おそらく敵に立ち向かうことは永遠にできません」
「……だな」
「そうだね、シオリちゃんの言う通り、だね」
三人で、改めて顔を見合わせて、頷き合う。
別に俺たちには、何か使命があるわけじゃない。だけど同時に、逃げた先に道がないことも想像

がついている。
たとえ他の勇者たちが魔王軍をどうにかしてくれて、それで人間界に平和が訪れたとしても、その場から逃げた俺たちは、そこで胸を張って暮らせるだろうか……
「真の勇者、俺たちも戦うことにするよ」
「それでこそ、勇者じゃ。具体的な作戦は、ハルトが偵察から戻ってからにする。それまでお主らは、体を休めて待っておれ。湯川の作った薬がある、これを使うとよいのじゃ」
そう言うと、真の勇者は鞄から液体の入った試験管のような瓶を手渡してくる。
湯川が誰かは知らないが、こんなものを作れるということは、Sレアである錬金術師の勇者のことだろうか。
真の勇者から受け取った回復薬を飲み込むと、身体中に力……魔力のような何かが染み込んでいくのがわかる。
少しの苦味と変な甘味が重なりあっているせいで飲みにくいが、良薬口に苦しということわざもあるぐらいだ。効果の高さからして、市販品のレベルではない。やはりSレアの錬金術師が作った物だと思うが……アカリとシオリが嫌そうな顔をしているのはなぜだろう。
……この独特な味が気に入らなかったのかもしれない。
壁に寄りかかって薬を飲んで体力を回復させていると、洞窟の入り口から忍者が走ってきた。
忍者は洞窟内を少し見回して、俺たちの休んでいるこちらへと寄ってきた。

「お館様、戻ったでござる！」
そのまま俺たちを完全に無視して、隣にいる真の勇者に向かって跪く。
俺たち三人に用事があるわけではなく、たまたま今ここにいる、真の勇者に報告するのが目的だったらしい。
「ハルトよ、いかがであったか？」
「お館様……イツキ殿、アカリ殿、シオリ殿も、聞いてほしいでござる」
忍者は、まずは真の勇者に向かって、次に俺たち三人の名前を呼びつつ、目線を合わせようとしてくる。
俺としても話を聞いておきたいと思ったから、こくりと頷く。忍者は他の面々の意思も確認した後で、再び口を開いた。
「まず第一に……お館様の読み通り、あれは別大陸から来た、魔王軍で間違いなさそうでござる。どうやら魔王本人ではなく、魔王の息子が指揮しているようでござるが……」
「魔王自身は力が強すぎて、結界に近づくことができないのじゃろうな……」
ちなみに、忍者に「なぜそんなことが分かったのか」と聞くと「魔王軍の近くに潜伏し、会話を盗み聞きしたのでござる」ということだった。
さも当たり前のように言っているが、この短時間でこれだけの情報を集められるのは、さすがは忍者というところか。

「それで、ハルトよ。敵の目的はやはり？」
「それについても、お館様の予想通りでござる。やつらはこの地に魔王城を建築するつもりでござる。元々この地に送っていた先遣隊に想定外の事態が起こり、責任をとるために魔王の息子が直々に出陣することになった……という噂も、耳にしたでござる」
「ふむ、想定外の事態とは？」
「それが、情報が秘匿されているようで、まだ調べきれていないでござる。噂では先遣隊に何かがあったとか……詳しいことは分からぬでござるが」
忍者の言う「先遣隊」が鬼の魔物たちのことだとすれば、「想定外の事態」とは、俺によってその先遣隊が全滅させられたこと……なのだろう。
念のため、そのこともあらかじめ話しておいた方がいいかもしれないな。
忍者の話が終わったタイミングで、真の勇者が意見を言おうとする前に、足を一歩前に踏み出す。真の勇者は空気を読んで黙ってくれたから、それに甘えて話をさせてもらうことにしよう。
「忍者、そのことなんだが……話がある。聞いてくれるか？」
俺が忍者に話しかけると、彼は真の勇者から俺へ視線を移した。アカリとシオリも、話を聞くために俺に改めて注意を向けてくれる。
「イツキ殿？　そういえば、イツキ殿は先んじて魔界に来ていたのでござるな。何か知っているでござるか？」

「ああ。というか、俺自身が当事者というか……お前が偵察中に手に入れた『先遣隊』とは、おそらく俺が戦って全滅させた魔物のことだと思う。だからおそらく、敵が言う『想定外の事態』っていうのは、何者かに先遣隊が全滅させられた……ことだろう」
真の勇者と忍者は、俺が嘘をついているのではないかと言いたげな、疑いの視線を向けてくる。
それはまあ、確かに。彼らが知る限り、俺は洗浄という、戦闘には向いていないギフトを持っているだけの、一般的な勇者でしかないからな……
忍者の場合は、アカリやシオリの会話を盗み聞きすることで、俺が特殊な力を持っていることには気づいているようだ。だが、それでも海の向こうから侵略してきた魔物を一人で倒しきれるほどだとは思っていないのだろう。
というか、俺のラストワンのギフトを知っているアカリとシオリにも、この魔界でそんな戦闘があったと簡単に信じてもらえるだろうか……そう思って二人を見ると、どうやら彼女たちは俺のことを疑っている様子はなさそうだ。
「イツキ君の言っていることは、本当だと思うよ。実は、洞窟にいるときに私たち二人に、パーティーメンバーであるイツキ君から、大量の経験値が送られてきてたからね……」
「そうです。……あ、そういえば、イツキのステータスカードは預かったままなので、後で返しますね」
そうか、アカリとシオリは、俺と一緒のパーティーに入ったままになっているから、俺が鬼を倒

して獲得した経験値が、二人のところにも送られていたのか。
そして、そういえばなくしたと思っていたステータスカードは、二人が拾ってくれていたんだな。
話が終わったら、返してもらおう。
俺たち三人が口をそろえて「魔王軍の先遣隊は、俺がすでに討伐した」と話をしていると、いつの間にか他の勇者たちも何人か集まっていた。声が、彼らの耳にも届いていたらしい。
真の勇者と忍者はどうやら信用してくれたようだが、周りの他の勇者たちからは冷たい視線を感じる。
そんな中、一人の小さな子供が他の勇者を押しのけて飛び出してきた。
よく見るとその子は、洞窟から出てきたときに真の勇者や忍者と並んでいた勇者だった。今までは別の仕事をしていたが、一段落したから俺たちの会話に交じることにしたのだろう。
「さっきの話、聞いてたよ！　ところで君、アカリやシオリと一緒にいるってことは、もしかして……」
「あ、ああ。俺も勇者の一人、名前はイツキだ。お前は？　真の勇者や忍者と一緒に行動していたから、大体の想像はつくが……」
「うん。僕も勇者。名前はヒガサで、ギフトは吸血鬼――Sレアのギフトだよ！　ねえ、ところで君は、どうやって魔物を倒したの？　僕と同じで、すごい強いギフトだったとか？」
「まあ、俺たち勇者は、レベルが上がればギフトに関係なく、ステータスは強くなるからな。敵から武器を奪って、それで戦って……って感じだな」
「へえ～、すごい！　僕も君みたいな、勇者になりたい！」
突然、背の低い少年に声をかけられたが、こいつもSレアの勇者だった。
言えるわけがないのだが、聖剣と魔剣のことを隠さざるをえないのは心苦しい。
それにしても、この世界は勇者として召喚された者とはいえ、こんな子供にまで責任を押しつけているのか。
Sレアの勇者なのだから、他の勇者に比べて強いのは間違いないのだろうが……まあ、深く考えるのはやめよう。
それと、吸血鬼からはよくわからない憧れのようなものを抱かれてしまったが、そのことについてもあまり考えないようにしよう。
期待に応えようとして何かを変えるのも馬鹿らしいし、そもそも期待にはどうやっても応えられそうにないからな。ありのままの俺を見て、とっとと夢から覚めてもらった方がいいだろう。
……吸血鬼だけでなく、真の勇者の方からも熱意のこもった視線を感じたが、まあこちらは俺の自意識過剰か何かだろうから、こちらこそ気にしないでおくことにしよう。
「……以上で、拙者からの報告は終わりでござる。お館様は、どう思うでござる？」
忍者は、この短時間で集められた情報を真の勇者に報告した。
その場に集まった全員が、真の勇者の発言を静かに待つ。

真の勇者は考え事をするように黙り込み、数秒後に「そうじゃな……」と言って話し出した。
「おそらくやつらは、勇者の存在には気づいておらぬ。想定外の事態というのも、せいぜい『強力な魔物が生息している影響で、連絡が取れなくなっている』程度に考えておるはずじゃ。じゃからまずは、その思い込みを利用して敵を撹乱する。そして最終的には、イツキ！」
真の勇者は全員に聞こえるように作戦を告げたあと、唐突に俺の方に向き直った。
「ん？　な、なんだ？」
「これからワシは、お主を徹底的に鍛え上げてやる！　アカリ……そしてシオリよ。お主らはこれからワシらの命令を無視してでも、イツキを守ることを最優先に行動するのじゃ！」
「もちろん、言われなくてもそうするよ！　ね、シオリちゃんもそうでしょ？」
「もちろんです。イツキも、とりあえず聖化から元に戻るまでは休んでいてください。周りのことは気にしなくてもいいです。イツキのことは私とアカリで守りますから！」
そのまま忍者は引き続き敵の偵察に向かい、真の勇者と吸血鬼の少年は、他の勇者たちに色々と指示を出しはじめた。
真の勇者が何を考えているのかは分からないが、俺のことを鍛えると言っても、いきなり何かを始めるのではなく、やるべきことを片づけてからになりそうだ。
どうやら今の俺の仕事は、とにかく休んで少しでも体力を回復させることのようだ。
働いている勇者たちには悪いが、一足先にテントの中で休ませてもらうことにしよう……

テントの中の、入り口に近いところで、壁にもたれて休んでいると、テントの入り口をめくって中に入ってこようとする気配を感じたので、薄目を開けて確認をする。
いつ魔物に襲われても対応できるように気をつけてはいたのだが、どうやら中に入ってきたのは、魔物でも知らない勇者の一人でもなく、シオリだった。俺は安心してもう一度目を閉じる。
シオリは俺を見つけると、俺が休んでいるすぐ隣に、同じように壁にもたれるようにして座り込んだ。そして、数秒間の沈黙の後、不意に俺に話しかけた。
「イツキ、起きていますか？　……そろそろ、起きませんか？」
別に俺は狸寝入りをしたかったわけではなく、意識は起きていても、体が重くて動くのが面倒だっただけだ。
朝起きるときに、あと五分、と布団の中で休みたくなるあの感覚と似ている。
だが、わざわざシオリが起こしに来てくれたのだから、目を覚まさないのはさすがに失礼か。
「……起きた。……シオリ、俺は何時間ぐらい眠っていた？」
「さっき別れてから二時間ほど経ちました。それよりも、真の勇者がイツキのことを捜しています。可能であれば、行った方がいいと思います。疲れはとれましたか？」
「そういえば、短時間でも休みをとったおかげか、かなり楽になったな……」
硬い床や壁にもたれかかって休んだだけなのだが、それでもその前と比べるとかなり体が楽に

なったように感じる。
もしかしたら、真の勇者から受け取ったあの薬のおかげかもしれないな。
聖剣のクールタイムが残っているから、聖化はまだ解除されていない。あと六時間ほどはこのままなので、今更どうすることもできないし、割り切るしかないだろう。
洞窟の中に外から日光が届くことはなく、ぽつりぽつりと光源が設置されている程度で薄暗いから時間が分からない。少し歩いて洞窟の外を見ると、ちょうど空が真っ赤な夕焼けに染まっていた。もうじき日が暮れる。勇者から作戦を聞いているわけではないのだが、今回俺たちは魔物にゲリラ戦を仕掛ける側なので、日が沈んで、あたりが闇に包まれてからが本格的な活動時間になるのだろう。
「シオリ、真の勇者たちから、何か具体的な作戦を聞いているか？」
「いえ、詳しくは全員が揃ってから話すと言っていましたが……あ、そうでした。イツキ、これ、あなたの鞄です。渡すの忘れてました」
「そういえば、どこかで落としたのを、拾ってくれてたんだったな……ありがとう」
「まったく、他の荷物はともかく、ステータスカードだけは落とさないようにしてくださいね」
「そうは言っても、あのときは必死だったからな……」
シオリは、俺の鞄を持ってきてくれていたようだ。感謝の言葉を伝えると、照れたように苦言を呈しながら、そのまま投げるようにして鞄を手渡してきた。

そういえば、俺が落とした鞄の中にはステータスカードも入っていたんだったな。あれだけ魔物を倒したんだから、俺のレベルもかなり上がっていることが期待されるし、一度内容を確認してみよう。

明野樹
年齢：17
レベル：40
ギフト1：洗浄魔法
ギフト2：聖剣／魔剣召喚
スキルポイント：70（有効期限切れ）

俺のレベルは、魔界で魔物を倒しているうちに40まで上がっていたようだ。
スキルポイントは、俺が寝て休んでいる間に有効期限切れになってしまったみたいだが、期限が切れてもポイントが消滅するわけではないのか。
ということは、もしかしたら再利用する方法があるのかもしれない。
可能性としては……例えば、レベルが上がったら期限切れのポイントも復活するとか？　だとしたら、今まで急いで使い切っていたのがもったいなかったのだが……まあ過去の話をしても仕方な

いか。
検証してみてから、その結果をアカリとシオリと……ついでに他の勇者にも共有することにしようかな。
ステータスカードを鞄に戻して洞窟の外に出ると、真の勇者と忍者と吸血鬼の三人と、それを他の勇者たちが取り囲むようにしているのが目に入った。アカリと猫は、その全員と少し距離をとるように離れた位置で待機していた。
どうやらまだ作戦会議は始まっていないらしい。俺とシオリが来るのを待っていたのだろう。アカリと猫のいるすぐ近くに歩いていくと、自然と視線は中央に立つ真の勇者へと向いた。
「イツキ、来たか。それではハルトよ、まずは説明を頼むのじゃ」
「お任せくだされ、お館様！　……それではまずは猫殿、敵戦力について、報告をしてほしいでござる」
会議の進行を任された忍者は、早速猫に話を振った。
忍者は忍者で敵のことを調べてはいるのだろうが、魔界のこととなると、彼よりも猫の方が詳しいはずだ。それに、猫たちは猫たちで独自に情報収集をしているにちがいないからな。忍者もそれを察したようだ。
考えてみると、敵の中に潜入するにしても、人の姿よりは猫の姿の方が怪しまれにくいだろうしな。

「まず敵は、海を越えた向こうの大陸を支配している魔王の軍勢にゃ。上陸済みの魔物が約三十部隊。今も続々と集結を続けているにゃ」
「拙者が調べた限りでも、同じような感触でござる。それぞれの魔物のレベルが高く、直接戦って全滅させるというのは現実的ではないでござる……」
忍者の言う「強い」というのがどれぐらいなのかは分からないが、まさか真の勇者よりも強いことはないはずだ。
というか、そんなことになっていたら、俺たちにはもう勝ち目などないし、真の勇者や忍者たちもそもそも戦おうとすらしないはずだ。
逆に、真の勇者が「戦う」態度でいるということは、こちらの実力が劣っているわけではなく、せいぜい「戦えば勝てるだろうが、手強い」ぐらいなのだろう。……あとは、敵の数の多さが問題になってくるぐらいか。
「ハルト、そして猫よ、報告ご苦労。……聞いての通りじゃ。敵の個体は、ワシやハルトやヒガサであれば問題なく倒せる程度の実力じゃ。ただ残念なのじゃが、他の勇者が相手にするとなると厳しい戦いになる。だから多くの者には戦いに参加するのではなく、後方支援で活躍してほしいのじゃ……」
どうやら、直接戦いに参加することになるのは、戦闘力のある一部の勇者だけで、他の勇者は戦力外ということらしい。確かにその理屈はわかるのだが、ＳＳレアのギフトを持っているアカリは

ともかく、俺とシオリまで戦力に加えているとは意外だな。特に俺なんて、ついこの間まで「皿洗い」とか呼ばれていたぐらいなのに……

そう思っていると、戦力外となった勇者たちの中にも同じように考えて不満を持つ者がいたらしく、何人かが真の勇者に詰め寄っていく。

「待ってくれ勇者様！　俺たちが後方支援なのは……まあ、仕方がない。だがその三人……特に、その皿洗いが戦闘班っていうのは、おかしいんじゃないか？」

「そうです！　勇者様の『弱者を見捨てず育てよう』という考えには感銘を受けますが、今はそれどころではありません！　そいつらも私どもと同じく、後方支援をさせておくべきです！」

てかこいつらは、よく俺のことを皿洗いの勇者と認識できたよな。見た目はかなり変わっているはずなのに。

「……ごめんなさい、イツキ。私が彼らに、あなたのことを話してしまったのです。『あなたたちが皿洗いと呼んでいた勇者を捜しにいくのだ』と。なので彼らからすると、今の姿のイツキこそが、皿洗いの勇者のことになるのですね……」

「あいつら、『イツキって誰だよ』ってうるさかったから、つい……ね」

シオリの弁明に、アカリがつけたした。

なるほど……つまりあいつらは、俺が皿洗いの勇者であることを認識していたから、真の勇者に「お前らは、最弱の勇者である皿洗い以下だ」と言われた気分になってしまったのだろう。

真の勇者はそんな様子に気づいたのか、勇者たちに向かって諭すように話しかける。

「まあ、少し落ち着くのじゃ。……それにお主らは、一つ勘違いをしておるぞ。ワシがイツキを連れて行こうとしているのは、決してこいつが弱いからではない。むしろイツキは、お主らなどよりも遥かに強い力を持っておる。何せこやつは次代の……いや、それはまあいいとして。いずれにせよ、イツキの実力もわからぬようなお主らを、これからの戦いに連れて行くわけにはいかぬのじゃ」

なんでこの爺さんは、俺をそんなに過大評価しているんだ？　お前は俺の何を知っている？　……まさか、聖剣や魔剣のことを気づいたのか？

というか、仮に真の勇者本人が俺について何か知っているとしても、そんな説明では……

「真の勇者様！　お言葉ですが！」

「いくら真の勇者様のお言葉でも、それは納得できません！」

そりゃそうなるよな。これじゃあむしろ、火に油を注いだようなものだろう。

「こいつらはこう言っているが、どうするんだ？　俺としてはここに残って後方支援をしても構わないんだが……」

「ならぬ。アカリとシオリはともかく、お主は戦いに参加するのじゃ！」

仕方がないので別の案を出すことで勇者たちを納得させようとしたのだが、今度は真の勇者の方が納得いかないらしい。

「だから、俺はよくても、そんな説明だとこいつらが納得しないだろう……」

「イツキよ。この機会にお主の力を示してみせればよかろう！　……そうじゃな、ここにいる勇者全員をお主一人で倒すことができれば、文句を言う者はおるまい！」

挑発的なセリフを聞いて、さすがの勇者たちも声に怒気が混じりはじめた。

今までは、「勇者」というギフトを持った勇者だからという理由だけで従っていた者が大半だろう。これを機に考えを改めて――

「真の勇者様は、そこまで耄碌してしまったか……であれば仕方ない。証明しましょう、皿洗いの勇者の弱さと……」

「「我ら勇者の強さを！」」

勇者たちの意見を聞けば、真の勇者の俺に対する期待も収まるはずだ。しかし、思ったよりも、彼らの真の勇者への信頼は厚かったようだ。そしてそのしわ寄せなのか、俺との戦いに勝つことで不満を解消する方針にまとまってしまったらしい。

こっちが勝てば勇者どもは納得するだろうし、逆に負ければ真の勇者が納得するだろうから、俺としては勝ち負けはどうでもいい。だけど、戦わずに逃げるというのは難しそうだ。仕方がないので適当に戦うか……

そう思って半ば諦めかけていると、今まで黙って見ていたアカリが、助け船を出すために勇者たちに話しかけてくれた。

「ねえ君たち、そんなことをして格好悪いと思わないの？　イツキ君一人に大勢で……でも、そんなに戦いをしたいなら、私が相手になるよ？」

「いやアカリさん、あんたが強いのは知ってるからいいんだよ。俺たちは、あの皿洗いが……」

「イツキ君が君たちより弱いって言いたいの？　だとしたら、君たちには残念だけど、見る目がないね！」

……アカリさんや？　どうして君も、そんな喧嘩を売るような口調なのかね？

もう少し穏便にまとめてくれてもいいと思うのだが……

「それに、仮にイツキが弱いとして、あなたたちは弱い者相手に囲んで叩いて、それで楽しいのですか？」

シオリさん？　別にこれは、悪口大会じゃないからな？

お前までアカリに便乗しなくてもいいんだぞ？

アカリとシオリは、間違ってはいないのだが、勇者たちの逆鱗に触れるようなことをポンポンと口にしていった。

そんな二人に煽られた勇者たちは、そのまま激高する……かと思ったら、むしろそれで冷静さを取り戻したらしい。

気づけば、騒いでいるのは勇者の中の一部だけになり、周りの勇者からは冷たい目線を向けられていた。

それにより、自分たちの間違いに気がついたというよりは、自分たちが少数派であると気づかさ

れただけというか……

「……くそっ、しらけたぜ。おいみんな、あんな女子に守られてるようなやつは放っておいて、俺たちは俺たちにできることをしよう！」

騒いでいた勇者たちが捨て台詞を残して洞窟の中に帰っていくと、何事もなかったかのように他の勇者たちもそれぞれの作業に戻っていった。彼らがどういう気持ちせよ、俺としては穏便に片づいてくれて助かった。

「イツキ、あんな雑魚勇者どもは放っておいて、私たちは私たちの使命を果たしましょう」

「そうだよ、イツキ君！　大丈夫だよ、イツキ君は私が守るから！」

シオリもアカリもどこかずれている気がするのだが……まあいいか。

◇

結局この場に残ったのは、真の勇者と忍者と吸血鬼、俺とアカリとシオリの六人だけだった。

その後、俺たちは忍者に案内されて、敵が集まっている場所を一望できる丘の上へとたどり着く。気づかれないように息を殺して見下ろすと、鬼のような魔物が無数にうごめいているのが見てとれた。

「皆の者、あれが敵の拠点でござる……」

「うわ、すごい数だね……」

「いち、にぃ、さん……数えるのが馬鹿らしいぐらいに集まっていますね」

忍者の言葉をきっかけに、アカリとシオリが感想を漏らす。

そこにはいくつかの大きなテントが乱立している。そして、それとは別に、柵に囲われた中に鬼のような魔物が群れになって休んでいた。

ざっと見た感じ、一つの囲いの中に魔物が十体程度いて、そのコロニーが……二十ぐらい、だろうか。

数が多いのに加えて、並び方に規則性がないこともあって、正確な数は分からないが、いずれにせよ数百体の魔物がこの平地に集結している。

敵の数が果てしなく多いことを確認すると、忍者が改めて真の勇者に意見を聞いた。

「それで、お館様……いかがなさるでござるか？」

「そうじゃな。……ハルトよ、お主は一番強い敵がどこにいるか、分かるか？」

「そうでござるな……テントの中からは比較的強い魔物の気配を感じるでござる。しかし、その中で優劣をつけるのは難しいでござる……」

「ふむ。ワシと同じ考えじゃな……おそらく、敵の大将はまだこの地に上陸をしておらぬのであろう。しかし、軍の統率者ならば、そう遠くにはおるまい。であれば、ヒガサよ！」

「……え？　僕？」

突然話を振られた吸血鬼は、慌てた様子で返事をした。
「うむ、お主にはやつらに奇襲を仕掛けてほしいのじゃが……できるか？」
「適当に暴れればいいの？　そういうことなら任せて！」
「うむ。できるだけ派手に暴れてくれると助かるのじゃ。敵を殺すよりも、パニックを起こさせる感じで頼む」
「わかったよ！　今すぐ行けばいい？」
「タイミングまで含めて、お主自身に任せるのじゃ。あまり無理はせず、危なくなったら撤退してもかまわぬぞ」
真の勇者が作戦を伝えると、吸血鬼は羽を広げて意気揚々と魔物の群れの方へと飛んでいった。
危険な役割を任せられたはずなのに、どこか楽しそうに見えたのは、単に戦闘好きなだけなのか、それとも真の勇者に任されたことが嬉しいのか……
「ハルトよ、お主にはヒガサのサポートを頼むのじゃ。ヒガサ一人に敵の意識が向かうようにすることと、いざとなったらヒガサを救出する任務を任せたい」
「拙者にお任せを！　拙者の命に替えてでも、見事に使命を果たしてみせるでござる！」
「いや、お主は自分の命を一番に考えよ。今回はあくまで陽動作戦……使命など二の次でいいのじゃ！」
「お気遣い感謝つかまつる！　しからばこの命、真の勇者様のために使い果たしてみせましょう！」

「いや、お主……」
どうにも話が噛み合っていないような気がするが、まあこれは忍者のロールプレイみたいなものだから、本当に命をかけたりするつもりはないだろう。もしかしたら、俺たちの緊張をほぐすための、忍者なりのジョークだったのかもしれない。
魔物の群れがいる平地へ飛び出していった二人を見送った真の勇者は、俺の方へ振り返る。
「ということで、イツキよ。お主には露払いの役割を。アカリとシオリは、イツキの補助をお願いしたいのじゃが……」
「露払い？　つまりどういうことだ？」
「これからヒガサとハルトが騒ぎを起こす。ここから見た限り、あの二人を相手にできる魔物は見当たらぬのじゃ。しかし騒ぎが大きくなれば、敵の首魁も傍観を続けることはできぬであろう。急いでこちらにやってくるであろうよ。とはいえ軍の指揮官ともなれば、単独で動いているとは思えん」
「なるほど、つまり忍者と吸血鬼が暴れたのに釣り出された敵のボスを、真の勇者が討伐するから、俺はその周りにいる雑魚を片づければいいんだな？」
「そういうことじゃ。期待しておるぞ」
真の勇者の強さを身をもって体験している俺からすれば、この人とぶつかり合える魔物の存在など想像もできない。つまりこの作戦の成否は、俺たちがいかに周りの雑魚を食い止められるかにか

かっている。
重大な使命を与えられたことに緊張感を覚えつつ、しばらくあたりを観察していると、魔物の群れのど真ん中で巨大な火柱が立ち上った。
木製の柵や革製と思われるテントに次々と火が燃え移り、そして火柱の近くには燃えさかる炎を見ながら高笑いをしている吸血鬼の姿が……これじゃ、事情を知らない人が見たら、どっちが魔物だか分からないな。
吸血鬼は背中に羽を広げてふわりと浮き上がり、炎の上昇気流に乗ってさらに高度を上げていった。全体を見渡せる高さまで飛び上がると、そこからまた新たな火種をまき散らし、火災はさらに広がっていく……
ついさっきまでは夜の暗さと静けさに包まれていた空間が、炎が燃え上がる激しい音と、魔物の断末魔の悲鳴が折り重なっている、混沌とした空間に生まれ変わっていた。
「うわぁ……ひでぇ……」
見るに堪えない地獄のような光景があっという間に作り上げられたのを見て、思わず呟くが、どうやら効果はあったらしい。
「イツキよ、来たぞ」
「……っ、あれか！」
真の勇者に言われて海の向こうに視線を向けると、巨大な羽を広げた魔物がゆっくりとこちらに

向かって移動していた。
あれがこの軍のボス、魔界の王子――魔王子なのだろう。
その周りには予想通り、護衛をしていると思われる強力な魔物が三体付き従っている。
「それじゃあ、俺たちは手はず通り、周りの魔物を片づける！」
「イツキ君、私も行くよ！」
「私も行きます。ちょうど敵の数も三人のようですしね！」
振り返らずに飛び出すと、アカリとシオリもついてきた。
アカリはともかく、シオリが魔物と戦うところは想像できないが、彼女も俺たちと同じ高レベルの勇者であることは間違いない。
敵の数が俺たちと同じ数である以上、シオリにも戦ってもらう必要がある……か。
「……俺は正面の敵を。二人は両脇の魔物を！」
「分かった！　私は右を、シオリちゃんは左ね！」
「はい！　二人も気をつけてくださいね！」
二人の返事を確認した俺は、聖化によって強化された脚力でアカリとシオリを置き去りにして、あわよくばと護衛を無視して敵のボスへと突撃する。が……
「敵襲か！　だが、そうはさせん！」
敵のボスに向かって斬りかかった俺の剣は、正面を守っていた護衛の剣によって防がれる。想定

通りとはいえ、そううまくはいかないか。
だが、俺が突撃することで生まれた隙に真の勇者がすっと割り込んで、すぐに追いついたアカリとシオリも、それぞれの相手に奇襲を仕掛けることに成功する。
「イツキよ、よくやったのじゃ！　こやつはワシに任せて、お主はそいつらを片づけよ！」
真の勇者はそう言葉を残し、そのまま魔物のボスに攻撃を仕掛けながら、どんどん遠くに離れていった。
相変わらず常識外れのじいさんだが、これで俺の役目は無事に果たしたことになる。
後はこいつを倒すだけ、なのだが……
ガリガリと、金属製の剣同士がぶつかり合う鈍い音を響かせつつ、魔物と俺とのつばぜり合いが始まった。
さすがは魔王子を守る護衛といったところか、剣を押し込んでもびくともしない。どうやら単純な力比べでは互角なようだ……
「ぐ……くそ、他の魔物とは比べものにならないぐらいに……強い！」
「貴様ら、何者だ！　まさか、この騒ぎを起こしているのは貴様らの仲間か！　一体何が目的だ！」
「お前らを放っておくと、いずれ人間界はひどいことになる……つまり、お前らは悪だ！　だから俺たちが、ここで倒す！」
人間界に残された人々のことを考えた瞬間に、拮抗していた力の天秤が少しだけ俺の方に傾いた。

どうやら俺の聖化の力は、俺自身が正義を意識するほどに、力を増していくようだ。だったら……
「お前たちは、この地に生息している魔物まで蹂躙するつもりなのだろう？」
「だからどうした！　強い者が弱い者を支配する！　それの何がおかしいというのだ！」
こいつらは本当に、心からそう考えているのだろう。猫たちのことなど害獣程度にしか考えていなくて、自分たちこそがこの地を統べる頂点にいると勘違いをしているようだ。
だが俺は、猫たちのことを考えることで、さらに聖化の力が強まった。
徐々に徐々に、俺の剣が力を増して押し切っていく。
「馬鹿な！　我々が、お前らのような劣等種に負けるわけがない！」
「残念だったな。俺が……俺たち勇者は、こんなところで負けるわけにはいかないんだ」
今の俺は、一人で戦っているわけではない。
真の勇者も強敵と戦っているだろうし、アカリとシオリも俺と同じく護衛の魔物と戦っている。
ともに戦っている仲間を意識したからか、俺の中の聖化がさらに力を増していった。
両手に握る、魔物から奪った安物の剣を白い光が包み込み……剣自体が聖剣のように姿を変えた。
「悪いな……だが、正義のために、お前はここで死んでくれ」
擬似的な聖剣を最後にぐっと押し込むと、敵の持つ剣さえも斬り裂いて、勢いのまま、敵の体へと突き刺さっていった。
剣で貫かれた魔物は、そのまま灰になり消えていく。

「よし、これでこいつはなんとかなったが……二人は？」
少し離れたところで戦っているアカリとシオリの様子を確認すると、それぞれ一体ずつの魔物を相手にしているようだった。
アカリは、神霊術による光を身に纏って身体能力を強化しているらしく、取り巻きの一人と正面からぶつかり合っている。シオリは左手に本、右手に杖といういかにも魔術師らしい装備で戦っている。どうやら本に書かれた魔術を杖で発動させているようで、敵に反撃の余裕も与えずに一方的に蹂躙していた。
二人ともギフトを使いこなすことで、魔物相手に優位に戦いを進めているみたいだし、これは俺が手助けをする必要はなさそうか。
真の勇者に視線を向けると、こちらも一方的に魔王子を蹂躙している。
魔王子は、真の勇者の剣を防ぐだけで精一杯で、その様子はまるで弱いものいじめをしているようにも見えるほどだった。
むしろあの魔王子は、あの嵐のような攻撃をよく防いでいると思う……
「イツキよ！　ワシのことはいい！　それよりも周りの魔物を！」
「あ、ああ……分かった！　任せておけ！」
真の勇者は、戦いの最中にもかかわらず、俺が手助けに来たことに気がつき、こちらから何かを言う前に次にするべきことを命令してきた。

言われてみると、確かにいつの間にか俺たちは剣を構える魔物や、羽で空を飛びながら弓矢を構える魔物に取り囲まれつつあった。
魔物を倒したときに剣についた血糊を洗浄のギフトで洗い落とし、次々と襲いくる魔物を一体ずつ剣で薙でるように斬り裂いて葬る。そして、その魔物が持っていた剣を投擲することで、空を飛ぶ魔物も打ち落としていく。
敵のボスを護衛していた魔物と比べると、これらの魔物はたいした力を持っていないので、簡単に倒すことができる。だが、なにせ数が多い。
倒しても倒しても次々と湧き出して、飛びかかってくる。海の向こうからも、羽の生えた魔物が絶え間なく補充され、矢の雨を途切れることなく降らせ続けるから、常に移動して避け続けなければならない。
いい加減に終わりにしたいと思って、真の勇者の様子を改めて確認すると……まだ決着はついていなかった。相変わらず一方的な展開が続いているようだが、相手も魔王の息子だけあって、実はなかなか強敵なのかもしれないな。
「とりあえず、真の勇者の戦いが終わるぐらいまでは持ちこたえる必要がある。もしかしたら、先の長い戦いなのかもしれない……」
「よそ見とは、随分と余裕だな！　親父の仇、取らせてもらうぞ！」
俺が真の勇者の戦いに気をとられていると、いつの間にか上空からの弓矢による攻撃がやみ、一

匹の魔物が悠々と降りてきて俺の目の前に着地した。
他の魔物と比べて明らかに豪華な武装をしている。もしかしたら、将軍クラスとかの魔物なのかもしれないが……
「親父？　どれのことだ？」
その魔物に対し、俺が問いかける。
「～～っ！　お前が最初に、卑怯な不意打ちで殺した相手のことだ！」
「いやあれは……いずれにせよ、お前らは魔物だから、俺たちとは戦い合う運命というか……」
「問答無用！　死ね！」
自暴自棄になったかのように魔物が突撃してきたので、重心をずらして回避して、相手がバランスを崩したところを後ろから斬りつける。
背中から大量の血を噴き出した魔物は俺に返り血を浴びせ、そのまま灰のように崩れて死んでいく。
俺にかかった血は自動洗浄で綺麗に洗い落とされるが、まるで冷水を浴びせられたみたいに、心と体の温度が一気に下がった。
まるで失われていた理性、冷静さが突然戻ってきたように、心が冷え切っていく。
「そうか、俺は、殺していたのか……」
どうやら魔物たちにも、親がいるらしい。友のように親しい者がいれば、恋人のような者もいるのだろう。
猫たちを見て、そんなことにはとっくに気づいていた、知っていたはずなのに、敵だという理由だけで俺は……
だけど仕方がないじゃないか。だってここを死守しないと、人間界が蹂躙されることになる。そうしたら今度は、俺たちが殺される立場になってしまう！
「全軍！　突撃！　襲撃者を滅ぼせ！　仲間たちの仇を取るのだ！」
「「「グォオオオ！」」」
どうやら今、敵の標的は俺一人に定まったらしい。
これ以上殺すのは嫌だ。せめて少し考える時間を、頭を、心を、整理する時間が欲しい。
だけど敵は俺のことを待ってくれないし、俺の体は勝手に動く。敵の攻撃を紙一重で回避して、突き、薙ぎ払い、敵を斬り殺す。
頭をかがめて回避して、突き出された槍を踏みつけて、距離を詰めて首を斬り落とす。
「そうだ、これはあのとき、魔物に殺された村の人たちの仇討ちをしているだけなんだ。先に手を出したのはあいつらなんだ。俺は悪くない……」
「何をごちゃごちゃと言っている！　次は俺様が相手だ！」
目の前に現れたのは、三メートルを超すのではないかと思えるぐらいの、巨大な魔物だった。
全身が鎧のような筋肉に覆われていて、生半可な刃物では傷一つつけることができないだろう。

「お前の相手は、この剣では無理か。……残り時間はあと五秒。それだけあれば、十分だな」
敵を殺しすぎて刃こぼれがひどくなった魔物から奪ったの剣を投げ捨てて、魔剣をいつでも召喚できるように左手に集中し……
「イツキ！　無茶をするな、一旦撤退するのじゃ！」
「無茶？　俺はこいつを倒せる。無茶なんかじゃない！」
「周りを見るのじゃ！　それを倒して終わりではないのじゃぞ！」
「周り……」
真の勇者に言われて改めて周囲を確認すると、この魔物よりも遥かに大きな……まるでドラゴンのようなシルエットの巨大な何かが、この大陸に近づいていた。そしてそれに加え……
「アカリ！　シオリ！」
アカリとシオリは護衛とは別の魔物に襲われたのか、全身が血塗れになっていて、それでも今も獣のような魔物の群れと対峙している。
「イツキ君！　私たちは今のところはまだ大丈夫。でもそろそろ限界かも……」
「イツキ！　撤退しましょう！　このままでは勝ち目がありません！」
「すまぬ、ワシも敵のボスには逃げられてしまったのじゃ。ここで戦い続ける意味はない。今すぐに撤退を。ハルトとヒガサにはすでに合図を送っておる。手遅れになる前に、早く！」
真の勇者が懐から取り出した玉を大量にばら撒くと、地面に落ちたそれから大量の煙が噴き出して、あたり一面を覆う。
「一度バラバラに逃げて、その後ワシらの拠点で合流するのじゃ！　よいな！」
「あ、ああ……分かった！」
どうやらこの煙には、魔物たちの感覚を狂わせる効果があるらしく、目の前にいるはずの俺の姿が、あいつらからは見えていないようだった。
「どこだ！　逃げるのか！　俺様と戦え！　この卑怯者！」
俺に戦いを挑んでいる巨大な魔物も、煙を吸って俺のことを見失っている。
今のこいつなら、魔剣を出すまでもなく簡単に殺すことができるだろう。
人間界のことを考えたら、ここで倒して少しでも凶悪な魔物の数を減らしておくことこそが正義なのかもしれないが……どうしても俺は、そんなつもりにはなれなかった。
俺は今まで何をしていたんだろう。俺は一体、何をしたいんだろう。
正しいことをしてきたつもりでも、どうやら俺は、正義にはなれなかったようだ。
多くの敵と戦って、殺して殺して……
殺すことが正しいと割り切っていたはずなのに、今は目の前の凶悪な敵を一人殺すことさえ躊躇っている。
こいつをここで見逃したからといって、俺がこいつらに許されるということはないだろう。
だから俺がこいつを見逃すのは、俺自身がこの葛藤から逃げ出すためなのだと思う。見逃されて

いるのは、俺の方だ。ここでこいつを倒さなかったからといって、何かが解決するわけではない。だけどここで俺が、無防備な状態のこいつを倒してしまうと、俺はもう戻ってくることができなくなってしまうような気がするから。

「……悪いな。俺はお前とは戦わない」

暴れ狂う魔物に背を向けて、俺は真の勇者に言われた通り、その場を離脱した。

◇

仲間たちと別れて、その後敵をまくためにばらばらの方向へと走り、魔物の追跡を振り切ってから拠点としている洞窟に戻ると、さっきのメンバーがすでに全員そろっていた。

敵をあざむこうと遠回りをしたり、帰り道が分からなくなって回り道をした結果、どうやら一番最後になってしまったらしい。道中いろいろあったが、最終的に戻ってくることはできたのだから、迷子になったわけではない。少なくともこいつらの前では何食わぬ顔をしておくことにしよう……

「あ、イツキ君……お帰り！」

「ああ、戻ったぞ、アカリ。どうやら俺が最後みたいだがな……」

真の勇者とアカリとシオリ、それに忍者と吸血鬼たちは、全員で洞窟の壁際に集まって、小さなランプのような光源を囲んで話し合いをしているところだった。

立ち読みサンプル
はここまで

「イツキ、無事でしたか……なかなか帰ってこないので心配しましたよ」

「まあ、少し寄り道をしたからな。心配させたなら悪かったが……シオリ、お前とアカリは大丈夫なのか？　二人とも、随分とボロボロになっているように見えるが……」

シオリとアカリの様子を見ると、顔や服がボロボロというか、全身泥まみれになっている。それに、先ほどの戦いでも見た血の跡も残っていた。

「私のこれは、返り血だから大丈夫だよ。服の予備はあるんだけど、汚れを落とさないで着替えても意味ないからね……」

「そういうことなら……ほら、これで汚れは落ちたはずだ」

アカリとシオリの肩に片手をそれぞれそっと置いて、洗浄のギフトを発動させると、二人の全身にこびりついていた泥や返り血が一瞬にして蒸発するように消滅した。

綺麗になって「ありがとう」と礼を伝える二人を改めて観察すると、服の上から見える範囲に怪我などは特にしていない様子。

二人が無事で何よりだ……

汚れているのは二人だけではないだろうから、他の勇者たちにも同じことをしてやろうかと思っていると、アカリが不意に深刻そうな表情を浮かべた。

「あ、そうだ、イツキ君……私たちよりも、おじいさん勇者が大変なの！」

そういえば、俺たちが撤退するときに真の勇者は「敵に逃げられた」と言っていた気がする。